

老人福祉施設において園芸療法を用いたボランティア活動に参加した大学生の意識調査

小浦誠吾¹・古川千栄子¹・山岸主門²・野村二郎³

¹南九州大学園芸学部 884-0003 宮崎県高鍋町南高鍋11609

²島根大学生物資源科学部 690-1102 松江市上本庄町2059

³社会福祉法人慶明会 介護老人保健施設サンフローラみやざき 880-1111 宮崎県国富町岩知野355

An Attitude Survey of the University Students Who Participated as Volunteers in Horticultural Therapy at Some Welfare Facilities for Aged People.

Seigo KOURA¹, Chieko FURUKAWA¹, Kazuto YAMAGISHI² and Jiro NOMURA³

¹Faculty of Horticulture, Minami-kyushu University, Takanabe, Miyazaki 884-0003

²Faculty of Life and Environmental Science, Shimane University, Matsue, Shimane, 690-1102

³The jurisdiction of the Social Welfare Ministry Sunflora Miyazaki, Kunitomi, Higashimorokata, Miyazaki 880-1111

Summary

This research on Horticultural Therapy was carried out at some welfare facilities for aged people with the participation of students from some universities. We were made to notice that the benefits of using horticultural therapy with not only patients but also volunteer's student as well. This time, we forecasted on finding out whether if the participating volunteers could feel that they had received the similar benefits as well or not.

We asked three questions that (1)Why did you decide to participate in the activities at the welfare facilities for the aged people? (2)The intention of the continuation (3)the student's mental change to the following three different groups of students to reply. The first was group of Horticultural Therapy work(n=130); the second was group of engaging in the volunteer work(n=126) and the third was group of not interested in the project at all(n=220). These results indicated that the students in the first group had a tendency to express active mind and liveliness. In other words, the first group which realized that the knowledge of the gardening and themselves were useful for the activities may improve the student psychomotor faculties and sociality.

Key Words: horticultural therapy, volunteer, 園芸療法, ボランティア, 老人福祉

はじめに

われわれは、1998年から南九州大学園芸学部学生と共に、老人福祉施設（社会福祉法人慶明会 介護老人福祉施設サンフローラみやざき）に入所あるいは通所する老人を対象とする園芸療法活動を試みてきた。活動開始当初は、園芸学部園芸学科の教員と研究室所属学生を中心とした17名の学生による小さな取り組みであった。その後、「園芸療法実習および講義」が授業科目として組み込まれ、授業の一環としてこの老人福祉施設での園芸療法に園芸学部の学生を参加させた。その結果、4ヶ月間で13回以上の活動に参加した学生は180名を超えた。

2001年12月27日受付。2002年8月12日受理。

本報は人間・植物関係学会2002年大会（2002年6月、福岡県において発表した）。

園芸療法は治療行為よりもむしろ生活指導的役割が強いとする考え（松尾、1998）をもとに活動しており、こうした活動を継続していくなかで思わぬ効果が得られた。それは、対象となった施設に入所している障害のあるクライアントに身体的、精神的向上などの変化がみられただけではなく、この活動にボランティアとして参加した学生に顕著な精神的変化や成長がみられることを気づかされていたことからくるものである。従来から、園芸療法をとおして対象者である老人に効果が現われることについては、様々な報告がなされている（安川ら、1999；小浦ら、2001）が、ボランティアとしてその活動にかかわる者の変化に焦点を当てた研究はなかった。

そこで、この研究では、老人福祉施設での園芸療法活動にボランティアとして参加した学生に焦点を当て、彼

らの精神的変化について調査した。その結果、興味深い結果が得られたので報告する。

方 法

園芸療法中心の老人福祉活動（以下園芸療法）は、「社会福祉法人慶明会、介護老人保健施設サンフローラみやざき」に入所または通所利用し、PT(理学療法士：Physical Therapist)または担当医が、通常のリハビリ室での機能回復訓練（服部ら，1984；日本医師会，1994）が必要と判断された利用者に対して、1998年4月から2001年7月まで原則的に毎週1回のペースで行った。

1) 対象

a. 園芸療法ボランティア群（以下A群）：学生は全て南九州大学園芸学部所属する130人の学生で、所属学科は、園芸学科97名、造園学科28名、農業経済学科5名で、学年別の構成は、4回生34名、3回生67名、2回生29名、1回生0名であり、性別では男性が33.1%に対し女性は66.9%であった。具体的な活動内容は、活動1回目から3回目はリハビリに関する基礎知識や車椅子など補助器具の操作方法を学ばせた。また、ロールプレイにより障害者や介護者の立場を理解させた。同時に、クライアントとの対話方法や注意点の確認などコミュニケーションの取り方に関して学ばせた。4回目以降は、担当医および理学療法士から特定のクライアントと接する際の注意点を聞いた上で活動を開始した。活動内容は、理学療法士および担当教員がプランをたて活動の指揮をとるが、クライアントに付き添い実際に活動を促し直接補助する行為は学生が担当した。具体的には、クライアント1名に対して、データ収集担当学生1名と実際に園芸活動を直接補助する担当学生1～3名で1群を構成した。活動内容は、切花、鉢物、野菜、果樹およびハーブ類を利用しながら屋外の専用作業室または温室内で活動し、培養土作り、播種、苗の植え替え、寄せ植への作成、果樹・果菜類の収穫および試食、押花などを利用したクラフト作りなどであった。学生は、担当したクライアントの居室から作業室までの送迎、手を洗う際の補助、トイレに連れて行くおよび車椅子から椅子へ移動させるなどの簡単な介助も行った。クライアントとして参加したクライアントは延べ37名であり、全員軽度から中度の身体的障害をもっている。クライアントの痴呆程度は、測定時期で変化するものの半数以上が改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）でやや高度から軽度であった。年齢層は、60～69歳が21.6%、70～79歳が35.1%、80歳以上が43.3%であった。また、学生が担当するクライアントは、4ヶ月の活動期間中は原則的には途中変更はせず、1回の活動時間は居室からの送迎時間も含めて1時間とした。

b. 一般的ボランティア群（以下B群）：宮崎県内5箇所の老人福祉施設に週1回程度のペースで定期的に通う

南九州大学を含め宮崎県内5つの大学のボランティアサークルに所属する126名の学生の活動者である。また、その活動は、入所しているクライアントに対する身の回りの世話やイベント事のお世話など様々で、車椅子での散歩など若干の屋外活動もあるものの、ほとんどが室内での活動であった。学生達は大学公認または自主サークル活動者であるため、活動による単位の取得は認められておらず、A群とは異なり活動開始前に老人医療、老人福祉に関する教育を受けていない。また、担当制を導入していることはまれであるため、活動を行う施設や対象者は毎回変わることが多く、対象者一人一人に対する援助の内容や目的の設定は通常行われていない。

c. ボランティア無関心群（以下C群）：南九州大学園芸学部園芸学科の一部の学生で、具体的には園芸学科4回生15名、3回生65名、2回生112名、1回生28名合計220名であった。C群に対するアンケート調査は、任意の時期に行った。

2) アンケート調査の方法

A群およびB群は、活動の開始前と4ヶ月活動終了直後（実施回数13～32回、毎週1～3回活動）の2回アンケートを行った。C群は、任意の時期に1回のみアンケートを実施した。

3) 調査内容

老人福祉活動への参加動機に関する質問1. は活動開始前に、老人福祉活動の継続の意思に関する質問2. は活動4ヶ月後にアンケート形式で調査を行った。なお、これらの選択肢は、予備調査として事前に学生50名程度に行ったアンケート結果から回答数が多かった項目を使用したものである。

質問1：「老人福祉活動を実践しようと思ったきっかけ」（活動開始前）

選択肢：「ボランティア活動の経験があった」、「家族からの影響」、「友達に誘われて」、「教員・掲示板・マスコミなどからの触発されて」、「強制的に参加させられた」および「その他」質問2：「機会があれば行ってきた老人福祉活動を続けたいか？」（活動4ヶ月後）

選択肢：「是非続けたい」、「機会があれば続けたい」、「続けるかもしれない」、「やろうと思わない」および「わからない」

さらに、活動に伴う学生の精神的面的変化を確認するために、学生のボランティアに関する意識調査（迫ら，1997；山本ら，1994；山本ら，1995；山本ら，1996）と感情プロフィールテスト（POMS）の「活気」（Vigor）項目を決定する質問（横山ら，1990）および社会的な積極性や自信の有無などを加味させた質問について、活動開始前と4ヶ月後にそれぞれアンケート調査を行った。意識調査の評価基準は、いずれの質問に対しても1～5の5段階のなかで最も適していると考えた番号を記入させる方法を採用し、その選んだ番号の数値が高いほど積

極的で生活に活気があり、前向きに生きているといった意志が示されるように構成されている。

質問3：「日々生き生きしており、生活に充実感を感じる（充実感）」質問4：「積極的に交友関係を広げる気持ちがある（積極性・交友関係）」質問5：「生活に活気があり自信を持っていると感じる（自信）」質問6：「老人介護やリハビリ医療および心理学に関心があると感じる（福祉・医療への関心）」【評価基準】：1「まったく感じない」、2「すこしある」、3「まあまあある（普通）」、4「かなりある」、5「非常に多くある」の5段階評価。

結 果

1) 老人福祉活動への参加動機と継続の意思

協力してくれたA群およびB群の学生に、以下の質問1および2に対して最も適当と判断される項目を選ばせ、その項目ごとの回答率(%)を算出した。なお、回答の回収率は100%であった。

質問1「老人福祉活動を実践しようと思ったきっかけ」に関するアンケート調査結果を第1-(1)図に示した。

A群(n=130)においては、「教員、掲示板、マスコミなどから触発されて」を35.4%(n=46)と最も高く、ついで「元々ボランティア活動の経験があった」からとするものの23.8%(n=31)、「友達に誘われて」とするものが22.3%(n=29)となっていた。これに対してB群(n=126)では、「教員、掲示板、マスコミなどから触発されて」と回答したものは7.9%(n=10)しかなかった。最も多かったのは、「友達に誘われて」とするもので31.0%(n=39)であり、続いて「元々ボランティア活動の経験があった」とするものが27.8%(n=35)いた。「強制的に参加させられた」とするものはA群(n=130)では0.8%(n=1)、B群(n=126)でも1.6%(n=2)と両群とも極めて少なかった。

質問2「機会があれば行ってきた老人福祉活動を続けたいか?」に関するアンケート調査結果を第1-(2)図に示した。A群(n=130)およびB群(n=126)において、「是非続けたい」とするものおよび「仕事に余裕があり機会があれば続けたい」とするものがA群では34.6%(n=45)および55.4%(n=72)であり、B群では35.7%(n=45)および38.1%(n=48)であった。これらの今後も続けたいとする回答を合計すると、A群は90.0%(n=117)でありB群(n=126)の73.8%(n=93)より多かった。「積極的にはやらないが、やる可能性はある」、「やろうと思わない」および「わからない」とするものは、A群(n=130)は6.9%(n=9)、0.8%(n=1)および2.3%(n=3)であり、B群は16.7%(n=21)、0.8%(n=1)および7.9%(n=10)であった。

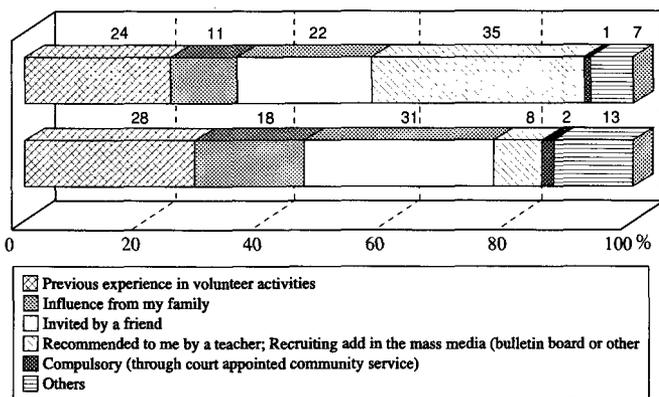
2) 活動に伴う学生の精神的面的変化

学生の現在の心情や生活観に関するアンケート調査である質問3~6を、A群およびB群に対して活動前と活動後の2回、そしてC群に対しては任意の時期に1回行い、その結果を第1表に示した。

第1-1表によりA群およびB群の活動開始前の回答とC群の回答を比較すると、質問6「福祉・医療への関心」のみは、A群が4.19、B群が3.26およびC群が2.65となり3者間で有意差がみられた。質問3「充実感」、質問5「自信」に関しては、A群およびB群はほぼ同等の値であり、C群は、質問3「充実感」および質問5「自信」の値が5A群およびB群より0.4~0.5低い値で有意差が認められた。質問4「積極性・交友関係」に関しては、3者間で有意差は認められなかった。

次に、第1-2表により活動4ヵ月後のA群とB群の回答番号の平均値を比較すると、質問4「積極性・交友関係」は有意差がなかったが、その他の質問に対しては、A群の値がB群より高い傾向が見られた。全体的にみると、A群のほうがB群よりも数値が高く、積極的に自信があり前向きに生きているといった精神的の高揚がより

(1) Why did you decide to participate in the activities at the welfare facilities for the aged people?
Group A: 130 Group B: 126.



(2) Do you plan to continue participating in volunteer activities at the welfare facilities for the aged people?
Group A: 130 participants Group B: 126 participants.

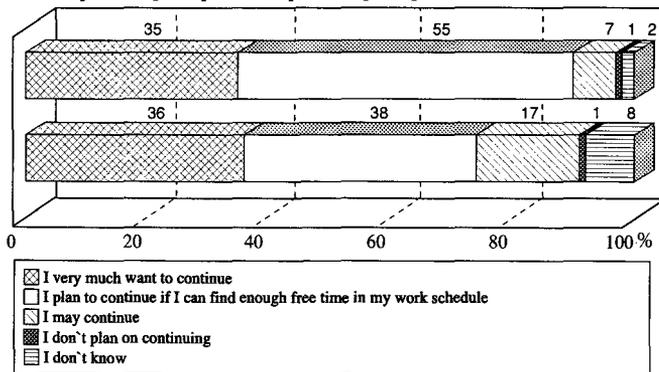


Fig. 1. Results from questionnaires sent to Group A and B.
Group A: FSStudents who participated in Horticultural Therapy activities as volunteer at the welfare facilities for the aged people.
Group B: FSStudents who participated in volunteer activities other than horticultural therapy at welfare facilities for the aged people.

Table 1. Results from questionnaires about students' attitude towards "vigor". Group A, B and C.

Table 1-1. Comparative attitude survey before start of activities for Group A and Group B as opposed to Group C. (mean ± SD)

Target	Answer time	Average score			
		Question 3	Question 4	Question 5	Question 6
Group A	Before start of activities	3.14±0.34 az	3.07±0.33 a	2.85±0.40 a	4.19±0.27 a
Group B	Before start of activities	3.17±0.39 a	3.12±0.40 a	2.90±0.42 a	3.26±0.47 b
Group C	At any time	2.77±0.31 b	3.01±0.35 a	2.42±0.32 b	2.65±0.38 c

Z: Mean separation within columns indicate significant difference by Duncan's multiple range test at P=0.05

Table 1-2. Results of Attitude Survey four months after start of activities for Group A and Group B. (mean ± SD)

Target	Answer time	Average score			
		Question 3	Question 4	Question 5	Question 6
Group A	Four months after start of activities	3.89±0.20 a	3.40±0.37 a	3.28±0.31 a	4.88±0.10 a
Group B	Four months after start of activities	3.56±0.31 b	3.32±0.34 a	3.09±0.32 b	4.12±0.50 b

Z: Mean separation within columns indicate significant difference by Duncan's multiple range test at P=0.05

Table 1-3. Results of Comparative Attitude Survey for Group A and Group B. Before and After start of activities. (mean ± SD)

Target	Answer time	The average of the answer number			
		Question 3	Question 4	Question 5	Question 6
Group A	Before the activities start	3.14±0.34	3.07±0.33	2.85±0.40	4.19±0.27
	After the activities four months	3.89±0.20	3.40±0.37	3.28±0.31	4.88±0.10
		*	**	*	*
Group B	Before the activities start	3.17±0.39	3.12±0.40	2.90±0.42	3.26±0.47
	After the activities four months	3.56±0.31	3.32±0.34	3.09±0.32	4.12±0.50
		**	ns	ns	*

***: Mean separation within Before the activities start and After the activities four months indicate 0.05 and 0.01 significant differences, respectively.
n.s.: not significant.

Survey Items.

When doing volunteer activities . . .

Question 3 - [Fulfillment] Do you have a feeling of fulfillment in your life?

Question 4 - [Positiveness, Friendly Relations] Do you feel you are developing deeper relations with other people?

Question 5 - [Confidence] Do you think your life is more active and you can derive more confidence?

Question 6 - [Interest in welfare and medical treatment] Are you interested in the care for the elderly, rehabilitative medical treatment and psychology?

Possible Answers

1. [No, not at all] 2. [Sometimes] 3. [Usually] 4. [Very much] 5. [Overwhelmingly]

Group A: Students who participated in Horticultural Therapy activities as volunteer at the welfare facilities for the aged people.

Group B: Students who participated in volunteer activities other than horticultural therapy at welfare facilities for the aged people.

Group C: control group (university students randomly selected).

顕著に表れた。有意差が認められた質問としては、A群、B群の順で、質問3「充実感」が3.89と3.56、質問5「自信」が3.28と3.09および質問6「福祉・医療への関心」が4.88と4.12であった。ポイントで両者間の差が最も大きかったのは質問6「福祉・医療への関心」であり、A群の場合は開始前の4.19から4ヵ月後には4.88に上昇しており、これはほとんどの活動者が「5. 非常に多くある」を選択したことになる。

第1-3表により活動前と4ヵ月後のA群およびB群の回答番号の平均値を比較すると、A群は全ての質問で有意差が認められているのに対して、B群は質問3「充実感」および質問5「自信」に有意差が認められたものの他の質問では有意差は認められなかった。

考 察

老人福祉活動に対する参加動機に関して、「教員、掲

示板、マスコミなどから触発された」ためとするものがA群の学生はB群より約4倍多かったことは、一般的な老人福祉的なボランティア活動は多くの若者に認識されており、大学で改めて触発されることが少なかったのに対して、園芸療法に関しては園芸学部生であるA群のみが大学内で情報を得やすく、触発されたことが影響したことによるものであろう。また、A群の学生は、4ヶ月の園芸療法ボランティア活動の終了後も「継続したい」という意志を示すものがB群より多かった。これは、担当したクライアントと継続して付き合う園芸療法に参加した学生は、クライアントの身体的及び精神的な向上をより身近に感じ、自分の活動が実際に役に立っているという充実感を感じやすかったことで、たとえ単位などの利害関係がなくなった場合でも、自主的にボランティア活動に参加し続けたいという意思を示す要因になったのではない。

A群、B群およびC群に対する活動前の心情や生活観を調査する質問の回答結果をみると、3群間の有差がみられたのは質問6「福祉・医療への関心」のみで、A群、B群、C群の順で福祉・医療への関心が高かった。これは、A群の学生は、教員やマスコミなどから園芸療法や老人福祉に対するある程度の知識や情報を取得し、その後活動を開始する機会が多いことからきたもの

のだろう。

A群およびB群に対する活動4ヵ月後の心情や生活観を調査する質問の回答結果より、A群の方が質問4「積極性・交友関係」以外の質問に対してB群より有意に高い傾向で、一方、A群、B群ともに活動前の値より活動4ヵ月後の値の方が全ての質問に対して高い値であり、活動により前向きな意識が強くなったようだ。この結果は、A群、B群いずれの学生にとってもこのような福祉活動に参加することは、単なる無償行為による満足感のみならず、学生自身が自分の存在価値を再認識し自身を持てたことで、社会性や積極性が向上し前向きになったことを示唆しているのではないだろうか。A群がB群よりもさらに高い値になったのは、植物などの自然を媒体として利用する園芸療法に学生がボランティアとして参加することで、クライアントとの信頼関係を持ちやすかったことが要因としてあげられそう。

今回の調査結果から、A群の学生が参加した園芸療法は、クライアントのQOL(Quality of Living)を向上させることを目的としていたにもかかわらず、園芸学を専攻し植物を研究対象とする学生にとっても、その専門性を活かしながら障害をもつクライアントの役に立つことができた喜びによって、学生自身の精神が無意識に前向きになったと考えるのが妥当であろう。また、活動を行った学生にとって、今回の活動を行う際に教員や施設職員の指導または監視下で安心して活動できたことも、一要因となっていたようだ。

単に草花を「見る」という行為よりも、「育てる」という行為のほうが「活気」といった正の感情が増える傾向があると指摘されている(遠藤ら, 2001)。すなわち、老人福祉活動に園芸療法を活用することは、クライアントと共にこの「育てる」行為を活用することで精神面の向上を伴いながらリハビリ効果を向上させることが期待できる。また、園芸療法は一過性ではなく担当者と共に継続して活動することが基本であり、今回の結果においても、4ヶ月以上粘り強くそのボランティア活動に参加した学生は、自分自身の自信や充実感の向上など精神面に好影響が認められたことを示していた。そして、このような体験は、現代の学生にとって日常では得難いものであり、特に園芸療法のボランティア活動は、園芸学部生であるA群の学生にとっても、通常の園芸作物の経済栽培に関する講義のみでは味わいがたい新鮮な体験となり、自己の価値を再確認できる感動的なものとなったことであろう。そして、打算的で人間関係が希薄になったと言われる現代の若者にとっても、クライアントとの比較的親密な人間関係を保ちながら福祉活動に参加することで社会的、精神的な好影響が期待されるのであれば、今後は若者の教育の場でのこのような活動を推進していくことが必要となっていくのではないだろうか。そして、園芸療法は植物または自然を利用することで、クライアントとの良好な関係を持つことが比較的容易でお互いが受け入れやすいという特徴を有するため、学生の教育場面においても有用性が高いのではないだろうか。

摘 要

われわれは、介護老人保健施設において園芸療法を用いた活動を実施してきた。そのなかで、園芸療法に参加した老人だけではなく、ボランティアとして参加した学生の心理と意識の変化が現われることに気づかされていた。そこで、園芸療法を用いた老人福祉ボランティア活動が、学生に与えた影響について調査した。調査はアンケート法を用い、その主な内容は、1) 老人福祉活動への参加動機、2) 老人福祉活動の継続意思および3) 精神的变化に関するもので、全体で6つの質問項目で構成されている。調査対象は、園芸療法ボランティア群(n=130)、一般ボランティア群(n=126)およびボランテ

ア無関心群(n=220)の3群の回答を比較分析した。その結果、園芸療法ボランティア群は35%が「教員、掲示板、マスコミなどから触発され」園芸療法ボランティアに参加したものが多く、4ヶ月の園芸療法ボランティア活動の終了後も「継続したい」という意志をもつものが90.0%と、一般ボランティア群の73.8%をはるかに超えていた。また、園芸療法ボランティア群は活動を通して、社会的な積極性や自信を獲得していた。こうした学生の精神面の前向きな変化は、植物を研究対象とする園芸学専攻の学生にとって、その専門性を活かしながら、障害をもつクライアントの役に立てたという喜びによるものが大きいことを示しているであろう。

引用文献

- 遠藤まどか・三島孔明・藤井英二郎. 2001. プランターでの植物栽培が脳波、心拍変動、感情に及ぼす影響. 人間・植物関係学会誌 1(1): 21-24.
- 小浦誠吾・内山晶代・野村二郎・牧野 明・土屋利紀. 2001. 高齢の脳梗塞患者への園芸療法の実践事例. 人間・植物関係学会誌 1(1): 25-27.
- 服部一郎・細川忠義・和才嘉昭. 1984. リハビリテーション技術全書. p.25-26. (株)医学書院. 東京.
- 松尾英輔. 1998. 園芸療法を探る一癒しと人間らしさを求めて. p.184-195. (株)グリーン情報. 名古屋.
- 日本医師会. 1994. リハビリテーションマニュアル. p.34-38. 日本医師会. 東京.
- 迫 明仁・上地雄一郎・山本 力. 1997. ボランティア活動に関する学生の意識と動向. 岡山県立大学短期大学部研究紀要 4: 13-26.
- 山本 力・迫 明仁・上地雄一郎. 1995. 岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部学生の生活と意識に関する調査. 岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部平成5年度特別研究報告書 2: 1-16.
- 山本 力・迫 明仁・上地雄一郎. 1996. 学生生活と意識に関する調査(2) - 学生相談を中心に -. 岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部平成6年度特別研究報告書 3: 1-18.
- 山本 力・迫 明仁・上地雄一郎. 1997. 学生生活と意識に関する調査(3) - ボランティア活動を中心に -. 岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部平成6年度特別研究報告書 4: 13-26.
- 安川 緑・岩元 純・原 等子・松尾英輔・吉川敏一. 1999. 園芸療法による老人の心身機能の変化とHealing効果に関する研究. (財)木村看護教育振興財団 平成11年度看護研究助成事業 看護研究収録 8: 77-87.
- 横山和仁・荒記俊一・川上憲人・竹下達也. 1990. POMS(感情プロフィール検査)日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌 37: 913-918.